

## 就学前児はどのような「願い」 を持っているのか

:「3つの願い」という方法を用いて

藤 崎 亜由子  
麻 生 武

### 1. 問題・目的

「願い」は、「いま・ここ」にはない未来や世界を思い描くという意味で極めて人間的な欲望である。願いには、明日天気になって欲しいと願うような極めて日常的なものから、世界の平和を願うという抽象的なものまで存在し、私たちは日々何かを願って生きている。また、大人は子どもと接するときに、「大きくなったら何になりたい？」などと繰り返し願い事を尋ねたり、願い事を短冊にして七夕の日に笹に飾ったり、流れ星に願い事をするなどを通して、子どもの中に「願い」を育てていく。では、子ども達はどのような「願い」をもって現代を生きているのだろうか。そもそも、子どもたちの中には、いつごろどのような「願い」が生まれてくるのだろうか。本研究は、幼児期の子どもたちに焦点をあて、彼らの中にどのような「願い」が生まれているのか、その実態を探ることを目的とした。

「願い」は、大人とのやりとりを通して、その時代・社会の状況を自己の中に取り入れていく過程でもある。子どもの「願い」の実態を調べる調査として「将来の願い」を尋ねるものがある。例えば、第一生命が毎年公募している「大人になったらなりたいもの」調査では、サッカー選手やケーキ屋さんになりたい現代の子どもたちの将来の夢がみてとれる（第一生命保険株式会社、2007）。他方、昭和初期の幼稚園で実施された調査では、「将来の目的」として男児は

77%が「兵隊さん」と答え、女兒では「幼稚園の先生・学校の先生」が35%、次いで「お母さま」「お姉さん」が14%で続いていた(藤崎, 2015)。現代の幼児に「将来の夢」を尋ねた調査では必ず出てくる「ウルトラマンになりたい」などの空想的な夢(森, 1995; 富田, 2004)がそこには見られない。このように時代や社会によって異なる子どもたちの「願い」についての基礎的なデータを収集することが本研究の目的の一つである。

また、本研究では「将来の夢」に限定せずに、「願い」という大きな枠組みで、子どもたちに自由に願いを表現してもらった。その際、「3つの願い」という質問法を採用した。「3つの願い」とは、どんなことでもよいから3つだけ叶えられるとしたら何を願うかを尋ねる質問である。児童精神科医のKanner(1972/1974, p.185-188)は、投影法(projection method)の一種として3つの願いを子どもたちとの面接に使用し、子どもたちとはじめて接するとき十分に役立つ方法であると述べている。つまり、子どもたちの内面の葛藤や無意識の願望などを知る上で重要な手がかりとなるというのである。日本でも、児童相談所などの臨床場面でよく利用され、有効な手段の一つとして認められている(千野, 1993, p.35)。また、清水・清水(1995, p.53)も、子どもたちが自己の問題をどのように把握し整理しているかについて貴重な手がかりを提供してくれると指摘している。

以上のように、臨床的には有効な手段として認められているものの、「3つの願い」についての実証的な検証はそれほど多くはない。上述したKannerも、臨床的な側面から子どもたちの抱える問題と3つの願いの回答の類型化を試みているものの、定量的な検証は行っていない。定量的なデータを収集したものとして、古くはBoynton(1936)のアメリカでの研究をあげることができる。彼の研究では「もし何でも手に入るとしたら、何が欲しい(want)?」と尋ねているので、正確には「3つの願い」の手続きにはそっていないが、子どもたちの願望を調べた研究として重要である。6～17歳の1,569名のデータを収集して分析を行った結果、自転車や車、ポニーなどの具体物を願う子どもが多く、年長になると健康や幸せといった抽象的な願望が出現していた。その後「3つの願い」の手続きにそった形で、アメリカではいくつかの研究がおこなわれている。例えば、イリノイ州の公立小学校の5～14歳を対象とした研究(Witty

& Kopel 1939) やコロンビアの1・4・7・10学年(6歳～15歳に対応)の男女それぞれ10名ほどに調査を行ったMilgram & Riedel(1969)の研究をあげることができる。7～12歳の128名の男女を対象にした調査(Ables 1972)や、5歳から13歳の男女を対象とした調査もある(Guarnaccia & Vane 1979)。イギリスでは、Winkley(1982)が、バーミンガムの10～11歳の子ども402名を対象に「3つの願い」を調べている。以上の研究から浮かび上がる特徴は、年齢が上がるにつれて、願いは物質的なモノからより一般的・抽象的なものへと移行し、さらに将来という時間軸へも目が向くとともに社会全体の幸福や福祉の観点からの願いを含むものへと広がっていくことである(Ables 1972; Boynton, 1936; Guarnaccia & Vane 1979; Milgram & Riedel, 1969)。さらに性差も常に指摘され、男児はより個人的成功や所有物、お金などを望み、女児は社会的な人間関係への言及が多いという(Ables 1972; Guarnaccia & Vane 1979; Winkley 1982; Witty & Kopel 1939)。

さらに上述の研究の中では、発達の遅れのある子どもたちとの比較を行ったり(Milgram & Riedel 1969)、学習や感情面で課題のある子どもたちとの比較を行ったりしている(Guarnaccia & Vane 1979)。Winkley(2006)も精神的に課題のある子どもたちと健常の子どもたちとの比較を行い、3つの願いの臨床的な有効性について検討を行っている。その中で、精神的に課題がある子どもたちは、魔術的、空想的な願いではなく、「お母さんと一緒に住みたい」などの切実な現実的願望を示す傾向があるという。また、高齢者を対象とした研究では、「恐怖回避(長生きできますようになど)」が8割を超えるなど、各年代の発達課題に応じた回答が浮かび上がることが示されている(清水, 1993)

また、文化や時代的背景を考慮することも必要である。上述した研究は、アメリカやイギリスを中心に進められてきた。Tafarodi, Nishikawa, Bonn, Morio, Fukuzawa, & Lee(2012)が指摘するように、そこには文化差も存在する。彼らは、カナダと日本の大学生の比較調査を行い、カナダの学生はより社会的な側面に関するものや、自己理解やアカデミックな能力向上を願うものが日本の学生よりも多く、一方で日本の学生はお金や物質的なものを求める傾向があるという。また、第二次世界大戦中の1940年にオハイオで12歳の男女に

質問を行った研究 (Zelings 1940) では、最も多い願いは男女ともに「世界平和」であった。「3つの願い」については、あらためて文化による違いや、時代による変化を追ったデータの蓄積も必要となってくるだろう。

では、日本では「3つの願い」に関する定量的研究はどの程度集積しているのだろうか。まず、日本の研究として清水らが実施した一連の研究 (清水・清水・千野 1993a, 1993b 1993c, 1994a 1994b, 1995, 1996) を挙げるができる。その中では、中学、短大、大学、高齢者を対象とした検討がなされている。また、田丸 (1993 pp.198-202) は、少数ではあるが小学2年生と小学5年生のデータを集めている。近年では、竹内 (2017) も大学生を対象として「3つの願い」を問う質問紙調査を実施している。金田 (1979) は、子どもの内的世界の内容をよみとるために「3つの願い」を実施している。

以上の研究をまとめると、「子どもの3つの願い」に関する研究は、いくつかの実証的なデータの積み重ねがあるものの、日本における研究はまだ少ない。とりわけ就学前児の子ども達に関する組織的な研究がなされていない。清水・清水 (1995, p.63) や竹内 (2017) も指摘しているように、一般的な発達的变化を示す基準データを集め、子どもたちの願いの現れ方の発達の特徴を明らかにしていく必要がある。これまで日本の小中学生や大学生で見出されてきた結果と対比したうえで、就学前の「子どもの3つの願い」の標準データ収集し、その特徴を発達的に論じることも、本研究の目標である。

## 2. 方法

本調査は、国立大学法人N大学と附属幼稚園との共同研究の一環であり、実験実習の授業の一部として、学部学生がインタビューを担当し、2002年から2007年の6年間にわたって継続して実施したものである。

**手続き** 当時、園に所属した全園児を対象として、個別でのインタビュー調査 (1人あたり20分程度) を行い、子どもの発話はその場で記録用紙に書きとった。インタビューでは、3つの願い以外にも尋ねたが、今回は3つの願いのみを分析の対象とした。

**インタビュー調査の内容** インタビューは、次の手順で尋ねた。「もし神様

と仏様にお願ひしたら、なんでも願ったことを叶えてくれるとしたらいいね。〇〇君 (ちゃん) は、どんなお願ひでも3つだけ叶えられるとしたら、どんなお願ひをする? 神様 (仏様) が3つだけ、どんなことでも叶えてあげるって言ったら、〇〇君 (ちゃん) は、どんなお願ひをするかな? 3つ考えて。じゃあ、1つずつ順番に聞くから教えてね。(1)「何でもお願ひを叶えてくれるとしたら、最初にどんなお願ひをするかな? (どんなお願ひでもいいんだよ)、(2)「1つ目は、・・・をお願ひしたね。じゃあ、2つ目は何をお願ひするかな。なんでもお願ひしたことは叶えられるとしたら、2つ目に何をお願ひするかな?」、(3)「1つ目は・・・で、2つ目は・・・をお願ひしたね。じゃあ、3つ目は何をお願ひするかな。何でもお願ひしたことは叶えられるとしたら、3つ目に何をお願ひするかな?」。(1) (2) (3) とともに、子どもが答えたら「どうして・・・を叶えて欲しいの?」と理由を尋ね、答えない場合は、子どもたちの負担も考慮し、終了した。

Table 1. 対象児の人数と平均月齢

調査年	年少		年中		年長		合計人数
	男児	女児	男児	女児	男児	女児	
2002	2	4	28	29	32	31	126
2003	10	12	32	30	30	30	144
2004	14	15	30	31	33	29	152
2005	14	16	31	32	27	31	151
2006	11	12	28	32	30	31	144
2007	12	12	29	32	30	32	147
合計人数	63	71	178	186	182	184	864
平均月齢	48.9	49.1	56.3	56.6	67.7	67.8	
SD	3.2	3.5	3.4	3.4	3.4	4.2	

調査期間 2002年～2007

年の計6年：毎年、調査は6月から11月にかけて全園児を対象として行った。

対象児 各年度のインタビュー対象児の総数は Table 1 に示した通りである。6年間の総数は864名であり、内

わけは、年少児134名 (平均年齢4歳1ヶ月)、年中児364名 (平均年齢4歳8ヶ月)、年長児366名 (平均年齢5歳7ヶ月) であった (各調査年度の平均月例の詳細は Table 1 を参照)。864名のうち、年少児時点と年中児時点で双方の調査に参加したのは、計104名 (男児49名、女児55名) であった。また、年中児時点と年長児時点で双方の調査に参加したのは、計285名 (男児137名、女児148名) であった。

**分析カテゴリ** Table 2 に、願ひ事の分類カテゴリを示した。分類は Winkley (1982) のカテゴリに従った。清水ら (1993a, 1993b 1993c, 1994a 1994b, 1995, 1996) の一連の研究でも、同じカテゴリを使用している。ただし、

Winkley のカテゴリでは D-2 は、「現実的問題 (Real Problem)」として、解決しなければならない問題のみを扱っていたが、清水等に倣って「現実的要求」として幅広く日常の現実的な願い事をとりあげた。また、D-5「人間関係」は Winkley のカテゴリにはなく、清水らが「仲間関係」として新設したカテゴリである。本研究では、仲間関係のみならず家族のことも含めて、身近な他者との関係性に言及したものを「人間関係」としてまとめた。

Table 2. 願い事の種類カテゴリ

カテゴリ名	内容
A. 所有物	現実的に手に入れられるモノや財産を願う。 お金、動物、乗り物、家、おもちゃ・本、実用物、その他
B. 社会的正義	社会一般の視点から正義を願うもの。 例)戦争をなくしてほしいなど
C. 将来・仕事	自分自身の将来のなりたい姿に関わる内容。 現実的職業、非現実的職業、権力、名声、学校、結婚、出産
D. 個人的要求	
1. 一般的幸福	幸せになりたい、楽しく暮らしたい など
2. 現実的要求	現実に実現可能な体験 例)テレビがみたい、サッカーがしたい、あそびたい など
3. 自己変革	自分自身の能力の向上を願う内容 例)一輪車が上手になりたい、きれいになりたい など
4. 自己の魔術的变化や考え	ファンタジ的な変身願望や非現実的な行為や状態 例)お星さまになりたい、お姫様になりたい、空を飛びたい など
5. 人間関係 注)	人との関係性についての願望 例)お友達と仲良くなりたい、赤ちゃんが生まれてほしい など
E. 家や学校の環境の変化	家庭内環境、住居環境、学校環境の変化を望むもの 例)田舎で暮らしたい、学校を転校したい など
F. 海外旅行・冒険・休暇	海外旅行・冒険・休暇を望む回答 例)ハワイに行きたい、冒険をしたいなど
G. 恐怖からの回避	自己や他者の死や病気の回避 例)病気が治りますように、長生きできますようになど
H. その他	秘密と答えたり、質問の意図がわかっていないような回答。
I. なし・わからない	ない、何もお願いしない、しらない、わからない など

注. 清水ら(1993)では、「仲間関係」

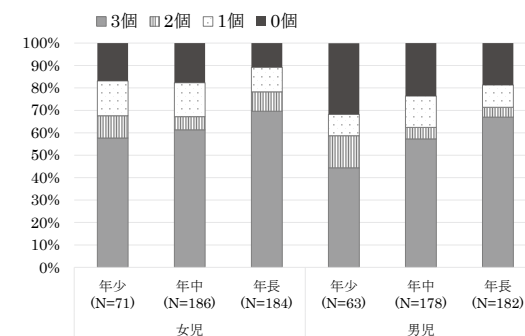
**一致率** 全園児の1つ目の願いについて、Table 2 のカテゴリにしたがって第一著者と著者以外の第三者で評定を行った。その結果、評定者間の一致率は98.3%であった。不一致の項目は、著者間で協議の上決定した。2つ目、3つ目の願いについては第一著者が分類した。

**倫理的配慮** 本研究は大学と附属の幼稚園が共同で実地したものである。研究の内容や実施方法などは、大阪成蹊大学人間を対象とする研究に関する倫理審査会において承認された。

### 3. 結果と考察

分析に先立ち、2002年から2007年の6年間で、回答に変化がみられるのかを年長児を対象に調べた結果、おおむねの傾向は各年度同じであり、年度を追って一定の方向に向かうような傾向は見られなかったため、本研究では6年分のデータをまとめて扱った。以下ではまず、全体的な傾向を知るために、年少、年中および年長時点での調査で重複する幼児も含め、全データ(864名分)を使用して分析を行った。その際、男女は重複しないため、性別比較にも対応のあるデータを含めた全データを使用した。年齢差の検討では、年少から年中へ、年中から年長へと対応のあるデータのみを使用した(Table 5)。なお、分析にはIBM SPSS Statistics23を使用した。

#### 3-1. 全体の傾向と男女による違い



#### 願い事の回答数について

3つの願い事をすべて答えた人数は、年長児250名(68.3%)であった。年中児では216名(59.3%)、年少児は69名(51.5%)であった(Figure 1)。一方で、1個も願い事を思い浮かべなかった人数は、年長児では54名(14.8%)であり、

年中児では75名(20.6%)、年少児は32名(23.9%)であった。先行研究は、幼児期を対象としたものではないので直接比較はできないが、Guarnaccia & Vane (1979)の5~7歳児のデータでは、1個でも答えられなかった児童(問題のない群)は5%であった。また、日本のデータ(清水・清水1995)では、児童相談所への来所児であるので直接比較はできないが、小学校低学年23名の中で、願い事を1つも思い浮かべなかった児童はいなかった。高学年では1割(23名中)、中学生や大学生の調査でも「無反応」は1割程度であった。

願い事の数の平均値は、年長児 2.3 個 (SD=1.1)、年中児 2.0 個 (SD=1.3)、年少児 1.9 個 (SD=1.3) であった。年齢と性別による二元配置の分散分析を行った結果、交互作用はなく ( $F(2, 864)=0.44, n.s.$ )、年齢と性別それぞれの主効果が有意であった (年齢  $F(2, 864)=6.53, p<.01$ ; 性別  $F(1, 864)=6.29, p<.05$ )。下位検定 (Tamhane の T2) の結果、年長 > 年中 = 年少であった (5% 水準)。また性別で比較すると、男児 (平均 2.03 個,  $SD=1.27$ ) に比べて、女児 (平均 2.22 個,  $SD=1.15$ ) の回答数が多かった。以上の結果より、加齢とともに願い事を尋ねられて、3 つとも思い描くことができるようになるとともに、男児よりも女児の回答数が多いことが示された。

願い事の内容について : Table 2 のカテゴリに従って願い事を分類した結果を Table 3 に示した。Table 3 では、3 つの願いを尋ねられ、そのうち少なくとも 1 つで、各カテゴリの回答を産出した人数とその割合を示した。また、参考として清水ら (1993) の中学生を対象とした調査結果も併記した。その結果、「I. なし・わからない」を除くと、「A. 所有物」や「D. 個人的要求」がどの年齢も多くなっていた。逆に「B. 社会的正義」「E. 家や学校の変化」「F. 海外旅行・冒険・休暇」「D-1 一般的幸福」は、幼児ではほとんど出てこない反応であった。金田 (1979) のデータ (小 1・小 4・大学生を比較) でも、平和などの社会的な願いは小学校低学年ではほとんどないという。また小学校 4 年生になると世界一周などの旅行願望が見られ始めるという。抽象的な願いではなく、「いま・ここ」の生活世界に根差した願いが多いというのが幼児期の特徴であろう。一方で、加齢とともに未来への展望が生まれてくることを示しているのが、「C. 将来・仕事」である。年少児は「C. 将来・仕事」に言及した人数はわずか 4 名 (3%) だったのに比べて、年長になると 79 名 (21.6%) へと増加していた。

Table 3. 「3つの願い」の年齢別・性別の反応率(3つの願いのうち少なくとも1つで、各カテゴリの回答を産出した人数の割合)

	年少		年中		年長		中学生*	
	男児 (N=63)	女児 (N=71)	男児 (N=178)	女児 (N=186)	男児 (N=182)	女児 (N=184)	男子 (N=118)	女子 (N=109)
	人数 %	人数 %	人数 %	人数 %	人数 %	人数 %	%	%
A. 所有物	28 (44)	39 (55)	76 (43)	72 (39)	88 (48)	65 (35)	67	> 48
B. 社会的正義	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	19	21
C. 将来・仕事	1 (2)	3 (4)	19 (11)	18 (10)	36 (20)	43 (23)	12	7
D. 個人的要求	25 (40)	28 (39)	78 (44)	109 (59)	90 (50)	115 (63)	62	< 80
1. 一般的幸福	0 (0)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	4 (2)		
2. 現実的要求	11 (18)	7 (10)	28 (16)	31 (17)	26 (14)	25 (14)		
3. 自己変革	2 (2)	1 (1)	13 (7)	25 (13)	23 (13)	49 (27)		$p=0.01$
4. 自己の魔術的变化や考	14 (22)	16 (23)	31 (17)	44 (24)	24 (13)	34 (19)		
5. 人間関係	3 (5)	7 (10)	20 (11)	34 (18)	21 (12)	46 (25)		$p=0.01$
E. 家や学校の変化	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8	7
F. 海外旅行・冒険・休暇	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	2 (1)	2 (1)	6	14
G. 恐怖からの回避	0 (0)	2 (3)	5 (3)	10 (5)	8 (4)	10 (5)	33	> 15
H. その他	5 (8)	5 (7)	3 (2)	5 (3)	5 (3)	4 (2)	10	7
I. なし・わからない	35 (56)	30 (42)	75 (42)	72 (39)	60 (33)	56 (30)	13	14

注) \* 中学生は、清水ら(1993)のデータを使用。清水等のデータでは、「D. 個人的要求」の下位カテゴリの数値は示されていないので表記していない。  
Fisherの正確確率(両側検定)は、有意差のあった項目のみを示した。

「I. なし・わからない」を除くと、「A. 所有物」や「D. 個人的要求」が多いという特徴は、清水ら (1993) の中学生のデータと共通していた (Table 3)。同様に女子短大生を対象とした調査 (清水ら, 1994) や大学生 (男女) を対象とした調査 (清水ら, 1996) の結果も共通していた。7~12 歳を対象とした Ables(1972) の研究でも、物質 (Material) (41%) とお金 (13%) を合わせると 54% となり、モノの所有の願いが最も多い。6~17 歳を対象とした Boynton(1936) の研究でも、家や乗り物、お金などのモノを願う回答が多かった。5-13 歳を対象とした Guarnaccia&Vane(1979) の研究でも、おもちゃやお金、家、食べ物、服などの物質的な願いがどの年齢層でも一番多かった。Witty & Kopel (1939) もニューヨークとユタ州で実施した調査から、物質的な所有が最も多く 3 ~ 4 割を占めることを報告している。「所有物」や「個人的要求」が多いのは、時代や社会を超えてある一定の安定した生活をする人の基本的な願望といえるだろう。

一方で、幼児期の子どもたちが他の年齢群と比べて比較的多いのは、「C. 将来・仕事」であった。年長児の 2 割が自分の将来や仕事に言及していたが、清水らの一連の研究 (中学生、女子短大生、大学生) では、2 割に満たない。幼児では「I. なし・わからない」の割合が多い中で、「C. 将来・仕事」への言及

が他の年齢群と比較しても多いというのは特徴である。具体的な内容としては、「将来の仕事」への言及も多いが、職業以外にも「早く小学校にいきたい」「5歳になりたい」など、比較的近接する未来への成長を願う回答がみられた。

「将来・仕事」について: Table 4 には、

年少児、年中児、年長児を込みにして、

「C. 将来・仕事」の中で具体的に将来

の仕事について回答した内容をまとめ

た。男児では、バスや電車などの乗り

物の運転手が最も多く、次いでサッカー

や野球の選手が多かった。女児ではケー

キ屋さん、パン屋さんなどの「食べ物屋」

が多くなっていった。第一生命保険株式

会社 (2007) が、未就学児から小学生

を対象に 1989 年から毎年実施している

「大きくなったらなりたいもの」調査の

結果では、年度によって差はあるが、

男児は、「サッカー選手」「野球選手」「学

者・博士」などが上位に来る。「乗り物

の運転手」もトップ 10 には入ってくる。一方女児は、「食べ物屋さん」「保育園・

幼稚園の先生」「看護師」などが上位にくる。「お花屋さん」も 10 位以内に入

ることが多い。本研究の結果は、奈良にある特定の幼稚園という地域性を超えて、

21 世紀初頭の日本の子どもが抱く将来の夢と符合する内容であるといえる

だろう。

一方で、同じ幼稚園で昭和初期に実施された「将来の目的」についての調査

結果と比較すると (藤崎, 2015)、女児の職業選択の幅が広がっていることが

わかる。昭和初期には「幼稚園・学校の先生」(35%) が多く、その次に「お母様」

(14%)「お姉さん」(14%)「お嫁さん」(13%) と続く。一方で、男児は「兵隊さん」

(77%) が圧倒的に多いが、女児 (12 種類) に比べて男児では 20 種類の職業

名があがっていた。本研究では、結婚や母になることを将来の夢としてあげる

子どもは一人もいなかった (ファンタジー的な内容で、「お姫様になって結婚

男児		女児	
	人数		人数
乗り物の運転手	19	食べ物屋	33
サッカー選手	13	花屋	12
野球選手	7	先生 (幼稚園など)	6
医者	5	医者	6
警察	4	アイドル・女優	4
忍者	4	服屋・靴屋	4
先生 (小学校など)	4	看護師	2
大工	2	レジ係	2
宅急便	2	忍者	2
探検・冒険家	2	乗り物の運転手	2
ゴルフ選手	1	スチュワーデス	1
サムライ	1	バスガイド	1
自衛隊	1	スケート選手	1
消防士	1	バレーボール選手	1
鍛冶屋	1	テニス選手	1
博士	1	バレリーナ	1
本屋	1	警察	1
自転車屋	1	画家	1
時計をつくる人	1	美容師	1
		昆虫博士	1
		大工	1
		動物屋	1
		人形屋	1
		ノート屋	1
		舞妓	1

「D. 所有物」について: 「A. 所有物」を願う子の割合は年長児では男児の方が女児よりも高かった (Table 3)。「A. 所有物」の内訳としては、多くの子どもたちが「おもちゃ」をあげており (270/864 名, 31.3%)、全体で見ると、男児 (155 名, 36.6%) の方が、女児 (115 名, 26.1%) よりもおもちゃを願う人数の割合が多かった (Fisher の正確確率,  $p=0.001$ , 両側検定)。おもちゃの内容としては、男児は戦隊もののテレビキャラクターのおもちゃやプラレール、ゲーム機などを願い、女児はプリキュアなどのテレビキャラクターのおもちゃやドレスなどを多くの子が願っていた。一方で、女児 (29 名, 6.6%) の方が男児 (15 名, 3.5%) に比べて多く願う傾向にあったのは、「動物」であった (Fisher の正確確率,  $p=0.045$ , 両側検定)。これは、Winkley(1982) の結果とも符合する。

大人では多く回答に挙がる「お金」については (清水ら (1996) の大学生対象調査では、男性 48%、女性 34%がお金をあげていた)、年長児でも 16 名 (4.4%) (男児 9 名, 女児 7 名) であり、年中児では 3 名、年少児では 0 名であった。Ables(1936) のデータ (6-17 歳対象) や Guarnaccia & Vane(1979) のデータ (5-13 歳対象) では、加齢とともにお金に言及する割合は増えている。ちなみに低年齢の子どもとの調査で、お金に言及した人数の割合は 6 歳児 (Ables, 1936) で 5% であり、5-7 歳児 (Guarnaccia&Vane, 1979) では 8.9% であり、本研究の結果とも類似する。幼児にとっては、抽象的な「お金」を思い描くよりも、身近に手に入る「おもちゃ」を願うことのほうが多いといえる。

「D. 所有物」の中で「食べ物」を願った幼児は全体で 37 名 (4.3%) (男児, 16 名 3.8%, 女児 21 名 4.8%) であった。小学 1 年、4 年、大学生に 3 つの願いを尋ねた金田 (1979) は、小学校 1 年までは「食べ物」がでてくるが小 4 ではなくなり、さらに大学生になると「遊び道具 (=おもちゃ)」が出現しなくなると述べている。加齢とともに身近で具体的なものから日常には手に入らないものを願うように変化していくといえるだろう。

「個人的要求」について: 「D. 個人的要求」は、年長・年中児ともに、男児よりも女児の方が願う割合が多かった。その下位カテゴリ「D-3. 自己変革」と「D-5. 人間関係」では、年長女児の方が年長男児に比べて願う割合が有意

に高かった。「D-3. 自己変革」は、「一輪車にのりたい」「ピアノが上手になりたい」「プールにもぐれますように」「野菜が食べられるようになるように」など、現在の自分が幼稚園や習い事でチャレンジしている事柄が多くあがっていた。また「きれいになりたい」という願望は、年長女児4名が回答していたが、男児では容姿への言及はみられなかった。「D-5. 人間関係」については、4名を除き、他すべてが「家族」「友達」「先生」という身近な他者との関係への言及であった。「お友達と仲良くしたい」や「赤ちゃんが生まれてきてほしい」など、友達と遊ぶことやきょうだいの誕生を願うものが多かった。中には「お姉ちゃんと仲良くしたい。いつもケンカばかりだから」「ママ怒らないで」など、身近な他者との対立を避けたいとの願望も少数ながらみられた。

**まとめ**：以上でみられた性差をまとめると、年長児では、男児の方が「A. 所有物」(特におもちゃ)を回答する割合が高かった。一方で、「D. 個人的要求」については女児が多く、その中でも「D-3. 自己変革」「D-5. 人間関係」については、女児の回答割合が高くなっていた。年少児では、性別による違いは見られなかった。この結果は、中学生や女子短大生、大学生を対象とした一連の清水らの研究でも同様にみられる傾向であり、このような特徴的な性差がすでに幼児期から芽生えていることを本研究の結果は示している。

### 3-2. 年齢による比較

ここでは子どもたちの願いが最も強く現れていると考えられる初出の回答に絞って、年少から年中、年中から年長への経年変化を分析した。分析の対象は、年少から年中への変化について追うことのできた計104名分(男児49名、女児55名)と、年中と年長への経年変化を追うことのできた計285名(男児137名、女児148名)のデータである。まず、年少から年中への変化について調べた結果、統計的に有意な差がみられなかったため、以下では年中児から年長児への変化について示す。

年中と年長時点の変化を調べた結果(McNemar検定)、女児のみで有意な差がみられた(Table 5)。女児で「将来・仕事」「自己の魔術的变化や考え」「なし・わからない」の3カテゴリで人数の偏りが有意であった。McNemar検定は、年中児時点で当該の回答を行った子どもが、年長児になったときに行わな

くなる人数と、その逆、つまり当該の回答を年中児時点では行っていなかったのに、年長時点では当該のカテゴリの回答を行った人数を2項分布で検定する方法である。McNemar検定の結果、年中児のときは「将来・仕事」について願っていたが、年長時点では願わなかった(=他のカテゴリの願いを行う)人数が、その逆よりも多くなっていた( $p=0.001$ )。一方で、「自己の魔術的变化や考え」は、年中児の時に願っていたのに年長児時点では願わなかった人数がその逆よりも多かった( $p=0.043$ )。同様に「なし・わからない」をみると、年中児時点では「なし・わからない」と回答していたが、年長児ではそれが無くなる(=何かを願う)人数がその逆よりも多くなっていた( $p=0.019$ )。つまり、全体として年長児では「なし・わからない」とする人数や「自己の魔術的变化や考え」を答える人数が減少し、「将来・仕事」についての言及が増えるといえる。

以上をまとめると、女児では年長児になるとより現実的な願望をもち、その中でも「将来の姿・仕事」について関心を向ける子が増えるといえるだろう。一方で、男児では年中と年長時点での回答に人数の偏りはみられなかった。男児は、幼児期において願う内容は大きく変化しないといえる。

Table 5. 年中と年長時点の各カテゴリの回答者数の比較(初出の回答の比較)

	男児(N=137)					女児(N=148)				
	1→1	1→0	McNemar	0→1	0→0	1→1	1→0	McNemar	0→1	0→0
A. 所有物	22	27	n.s.	31	57	16	28	n.s.	27	77
B. 社会的正義	0	0	n.s.	0	137	0	0	n.s.	0	148
C. 将来・仕事	4	4	n.s.	11	118	1	3	<	18	126
D. 個人的要求	28	16	n.s.	23	70	35	30	n.s.	30	53
1. 一般的幸福	0	0	n.s.	0	137	0	1	n.s.	1	146
2. 現実的要求	1	10	n.s.	7	119	0	6	n.s.	7	135
3. 自己変革	0	3	n.s.	8	125	6	11	n.s.	15	116
4. 自己の魔術的变化や考え	5	16	n.s.	12	104	10	21	>	9	108
5. 人間関係	0	9	n.s.	6	122	0	10	n.s.	17	121
E. 家や学校の環境の変化	0	0	n.s.	0	137	0	0	n.s.	0	148
F. 海外旅行・冒険・休暇	0	1	n.s.	0	136	0	0	n.s.	0	148
G. 恐怖からの回避	1	1	n.s.	2	133	1	5	n.s.	3	139
H. その他	0	2	n.s.	1	134	0	1	n.s.	2	145
I. なし・わからない	8	23	n.s.	18	88	8	20	>	7	113

注. 1→1 年中児時点および年長時点でも当該カテゴリの回答を行った人数。  
1→0 年中児時点では、当該カテゴリの回答を行ったが、年長児時点では行わなかった人数。  
0→1 年中児時点では、当該カテゴリの回答を行わなかったが、年長児時点では行った人数。  
0→0 年中時点でも、年長児時点でも、当該カテゴリの回答を行わなかった人数。  
< :  $p < 0.05$

## 4. まとめと総合考察

本研究は21世紀初頭における日本の就学前児の抱く「3つの願い」の標準データを収集し、その特徴を発達的に論じることが目的であり、結果をまとめると以下の4点に整理できる。1) 2) については、本研究の結果明らかになった幼児期の特徴であり、3) 4) については、日本における児童期・青年期のデータと共通する特徴がすでに幼児期にも芽生えていることを示す知見である。

1) 加齢とともに願い事を3つとも回答する人数は増加するとともに、幼児期では男児よりも女児の回答数が多いことが示された。2) 幼児期には、「お金」や「社会的正義」などの抽象的な願いではなく、「いま・ここ」の生活世界に根差した願いが多い。ただし、年長児になるとより「将来の姿・仕事」にも関心が芽生え、未来についての願いがでてくる。特に女児にその傾向が強い。3) 「所有物」「個人的要求」が多いのは児童期、青年期を対象としたデータとも共通する傾向である。ただし具体的な内容に関しては、幼児では身近なおもちゃや、身近な他者との関係性を願うことが多い。4) 男児は具体的な「所有物」、特におもちゃを願う割合が女児に比べて多く、一方で女児は「自己変革」や「人間関係」についての願いが多い。また、「動物」を飼いたいと願うのは女児が多い。この傾向は、現代日本の特徴として児童期、青年期を対象としたデータとも共通する傾向である。

### 4-1. 願い事の回答数の変化

本研究では「将来の夢」や「欲しいモノ」に限定せず、子どもたちがどのような「願い」をもつのかを自由に答えてもらった。その結果、3つ願い事を尋ねられて、3個答えられた人数は年長児約7割、年中児約6割、年少児約5割であった。幼児期の子どもたちが「願い」をもつということ自体が、決して簡単ではないことを示している。答えることができた願い事の数をみると、年長児が年中・年少よりも有意に多く、女児の方が男児より有意に多かった。この結果は、願望が加齢とともに大きくなる、また女児の方が男児より願望が大きいことを示しているというよりは、認知や言語などの心身の発達差として考えるほうがよいだろう。女児は男児に比べ相対的に発達が早い傾向があり、表情

の読み取りや、対人的なコミュニケーションの能力が優れている傾向があるという (Eliot, 2009/2010)。つまり、加齢とともに目の前にない何かを願うという行為の意味を理解し、それを他者に伝える力が発達することが願い事の数の増加と関連していると考えられる。3つの願いという質問は、単純に「大きくなったら何になりたい?」「何がほしい?」と尋ねることと比較すると難しい。しかし、このような仮定の質問に対してもそれを想像し答える力が幼児期にも育っていくといえる。

また、「願い」が1つも「ない・わからない」ことは、ある特定の個人の固定した特性ではなく、揺らぎがあることを示しているが Table 5 である。例えば、男児をみてみると、年中のときに「なし・わからない」と答えていた31名の内、年長になっても同じく「なし・わからない」と答えた者は8名にすぎない (女児では28名中8名)。ところが年中の時には答えていたのに、年長になって「なし・わからない」と答える者が18名もいる (女児では7名)。「叶えたい願いを考えつく」という反応は、ある個人の固定し持続性のある特性の現れというより、全体としては発達年齢や性差や時代的要因に規定されつつも、個々には確率的な揺らぎを伴って現象していると言えるだろう。

### 4-2. 年齢による願い事の変化

加齢に伴い願い事にどのような変化がみられるのかを統計的に検討した結果、女児のみで有意な変化がみられた。女児では、年長になると「自己の魔術的变化や考え」(お姫様になりたいなど)を願う幼児の割合が減り、一方で「将来の姿・仕事」の願望を抱く割合が増加していた (Table 5)。男児も年長になると、女児と同じ2割程度の子どもたちが「将来の姿・仕事」への願いを答えていた。年長児になると、将来についての新たな願望を見出すとともに、結果として「ない・わからない」とする人数の割合が減っていくといえるだろう。幼児期の子どもたちに「将来の夢」を尋ねた森 (1995) の研究でも同様に、大きくなったらウルトラマンになりたいなどと、TVキャラクターや人間以外の動物をあげる割合は加齢とともに減少し、年長児になると現実的になり得る職業をあげるものが8割を超えていた。同様に富田 (2004) も、「将来の夢」について尋ねられ、空想的な夢をあげる割合は4~5歳には多くみられるが、6歳



になると急激に減り、逆に現実的な夢をあげる割合が増えるという。

「将来の姿・仕事」について語れるようになるという発達の変化を支えるものとして、子どもたちの加齢にともなう認知発達を想定することができる。岩田 (2005) は、4歳ごろになると時間概念が発達し、「きのう」「きょう」「あした」という言葉を正確に使えるようになり、それに伴って未来の自分を思い描いて他者に語るできるようになると述べている。時間的なひろがりのなかで、未来の自分を想像する力が育っていくのであろう。そのような認知発達もまた、人とのかかわりの中で育まれるものである。清水・清水・千野 (1993b) も、願い事の実現は単に認知発達レベルと結びついているだけではなく、個人が社会的な状況を自分自身の課題としてどのように取り組んでいくのかという問題とも関連していると述べている。子どもたちは、大人から繰り返して「大きくなったら何になりたいか」を問われ答える中で、またごっこ遊び等を通して、「なりたい自分」を日常的に想像することによって、未来の自分というイメージを形作っていくのであろう。本研究の結果は、幼児期の子どもたちの「将来の自分イメージ」はまだ実現性を欠いてはいるものの (森, 1995)、今とは異なる未来の自分を想像する力が育ちはじめることを示しているといえるだろう。

また、願い事のなかでは全年齢群で「モノの所有」が最も多く3～4割を占めていた。特に「自転車ほしい」「ロボットがほしい」など、具体的なおもちゃを答えるものが多かった。モノの所有の中で「お金」と答えたのは、16名 (年長男児9名、年長女児7名、年中児3名、年少児0名) と、大学生を対象とした先行研究 (清水・清水・千野 1995) と比較すると少なかった。モノの所有願望を抱く際にも、具体的に欲しいおもちゃをイメージするのが、幼児期の特徴ともいえる。この結果は、年齢が低いほど願い事がモノになる傾向があり、かつお金などの抽象的なモノではなく具体物であるとする多くの先行研究の結果 (問題目的に詳述) と一致するものである。

#### 4-3. 性別による比較

本研究の結果、男児と女児とでは、抱く願いの内容にも差が生じていた。年長の男女を比較すると、男児は具体的な「所有物」、特におもちゃを願う割合が女児に比べて多く、一方で女児は「自己変革」や「人間関係」についての願

いが多かった。また、「動物」を飼いたいと願うのは女児で多かった。これは、児童期や青年期を対象とした多くの先行研究でも挙げられている男女の違いと一致している。先行研究でも、男性は具体的なモノを所有する願い (車、お金など) が多い一方、女性は友人や家族などの人間関係に関わる願いや自己の能力向上を願うことが多いと指摘されている (Ables, 1972 ; Guarnaccia & Vane 1979 ; 清水・清水・千野 1995 ; Winkley, 1982,)。このような男女差がすでに幼児期にも顕在化してくることは本研究で明らかになったことの一つである。この結果は、幼児期といえども、男女によってすでに異なる願望を抱き現実を生きていることを示唆している。

5歳女児 (年長) の回答割合が多かった「人間関係」を具体的にみると、「お姉ちゃんと仲良くしたい」「○○ちゃんともっと仲良くなってケンカしないように遊べたらいいな」などと、他者との関係調整を望むものが多く、「お友達いっぱいできますように」などと、新たな人間関係を望む回答もあった。また「自己変革」では、「一輪車に乗れますように」「プールでじょうずに泳ぎたい」などの身体的な技能の向上を望むものは男女ともに出現していたが、女児ではさらに「きれいになりたい」「かわいくなりますように」と、男児にはみられない他者関係的な自己の変容を含む回答が少数ではあるが存在した。化粧や衣装なども含めて変身願望は女の子の方が持ちやすいというジェンダーバイアスがかかっていることを示唆している。

以上の結果を総合すると、女児は5歳にもなると、あらたな願望に目覚めるといえるだろう。それは、対人関係に関する願望であり、他者との関係をうまく調整したり、他者からの評価が高くなることにかかわることであり、それらを新たな願望として抱き始めたといえるのではないだろうか。そして、先行研究が示すように、女児の対人関係志向的な願望は児童期、青年期、成人期と継続する。多くのジェンダー研究が示すように、男女によるさまざまな思考様式の発達の違いには、社会文化的な側面が大きく影響している (園田 2013)。本研究で取り上げた「3つの願い」の性差に関しても、家庭や保育の場における大人の子どもへの関わり方や、文化的環境が果たす役割も大きいだろう。

## 4-4. 課題と今後の展望

本研究は複数の学部学生が調査実施を担い、学生間の熟練度による限界がある。また、個別でのインタビューというフォーマルな場面での子どもの回答をみたものであり、保育者や保護者など身近な他者が尋ねた場合は、回答数や回答内容も異なることが予想される。また「3つの願い」という質問自体難しいものであり、幼児期の子どもたちが、3つという数的概念や、願い事という抽象的概念を正しく理解できたかどうかを発達的に十分に検証できてはいない。このような状況の中ではあるが、21世紀初頭の奈良の幼稚園における子どもたちの「願い」の内実を示したデータとして一定の役割を担うことができたのではないだろうか。今後、異なる地域、時代での比較を行いつつ、標準的なデータの蓄積を行うことが望まれる。

## 引用文献

- Ables, B. 1972 The three wishes of latency age children. *Developmental Psychology*, 6(1), p.186.
- Boynton.L.P. 1936 The wishes of elementary school children. *Peabody Journal of Education*, 13(4), pp.163-174.
- 千野美和子 1993 「3つの願い」 覚え書き : 「3つの願い」 検査の背景, 京都児童福祉センター紀要, 2, pp.35-39.
- 第一生命保険株式会社 2017 第 28 回 「大人になったらなりたいたいもの」 アンケート調査結果.  
[http://www.dai-ichi-life.co.jp/company/news/pdf/2016\\_072.pdf](http://www.dai-ichi-life.co.jp/company/news/pdf/2016_072.pdf)
- Eliot, L. 2009 『Pink brain, blue brain: How small differences grow into troublesome gaps』 Witherspoon Associates, New York.(竹田円 訳 2010 『女の子脳・男の子脳』 NHK 出版)
- 藤崎亜由子 2015 子どもの将来の夢 (2) : 昭和初期の保育資料から. 日本保育学会第 68 回大会発表, ポスター番号 12015.
- Guarnaccia, V.J., & Vane, J.R. 1979 children's wishes. *Journal of School Psychology*, 17, pp126-130.
- 岩田純一 2005 『子どもはどのようにして<じぶん>を発見するのか: 子どものことばと時間と空間』 株式会社フレール館.
- 金田利子 1979 子どもの人格・内面理解の理論と方法 (II) : 人格・内面に関する実態調査のこころみから. 日本教育心理学会総会発表論文集, 21, pp.176-177.
- Kanner, L. 1972/1974 『Child Psychiatry』 4th edition. Thomas, Springfield. (黒丸正四朗・牧田清志 訳 1974 『カナリー児童精神医学』 医学書院)
- Milgram, N.A., & Riedel, W.W. 1969 Developmental and experimental factors in making wishes. *Child Development*, 40, pp.763-771.
- 森加代子 1995 幼児にとつての「大人になる」とい現実. 人間文化研究科年報 (奈良女子大学), 10, pp.31-39.
- 清水寛之・清水里美 1995 子どもの「3つの願い」に関する発達の検討: 社会不適応を示す小学生の反応の再分析を中心に. 京都国際社会福祉センター紀要, 11, pp.53-64.

- 清水寛之・清水里美・千野美和子 1993a 子どもの「3つの願い」に関する理論的検討. 大阪青山短期大学研究紀要, 19, pp.111-123.
- 清水寛之・清水里美・千野美和子 1993b 「3つの願い」に関する発達の研究 I: 公立中学校に在籍する児童の反応, 日本教育心理学会総会発表論文集, 35, p.93.
- 清水寛之・清水里美・千野美和子 1993c 「3つの願い」に関する発達の研究 II: 数量化 III 類による中学生の反応の分析, 日本教育心理学会総会発表論文集, 35, p.94.
- 清水寛之・清水里美・千野美和子 1994a 「3つの願い」に関する発達の研究 III: 女子短大生と女子中学生の反応の比較検討. 日本教育心理学会総会発表論文集, 36, p.175.
- 清水寛之・清水里美・千野美和子 1994b 「3つの願い」に関する発達の研究 IV: 数量化 III 類による女子短大生の反応の分析. 日本教育心理学会総会発表論文集, 36, p.176.
- 清水寛之・清水里美・千野美和子 1995 「3つの願い」に関する発達の研究 V: 大学生の反応の特徴 (1). 日本教育心理学会総会発表論文集, 37, p.462.
- 清水寛之・清水里美・千野美和子 1996 「3つの願い」に関する発達の研究 VI: 高齢者の反応の特徴 (1). 日本教育心理学会総会発表論文集, 38, p.49.
- 園田雅代 2013 男の子・女の子になっていく子どもたち: 子どもの性自認・ジェンダー役割の発達・性的社会化を中心に. 『児童心理』 金子書房, 67(4), pp.266-271.
- Tafarodi, R. W., Nishikawa, Y., Bonn, G., Morio, H., Fukuzawa, A., & Lee, J. (2012). Wishing for change in Japan and Canada. *Journal of Happiness Studies*, 13, pp969-983.
- 竹内謙彰 2017 「三つの願い」 質問はどのような心的内容に迫りうるか. 立命館産業社会論集, 53(2), pp.63-75.
- 田丸敏高 1993 『子どもの発達と社会認識』 法政出版株式会社.
- 富田昌平 2004 幼児期における「将来の夢」と空想/現実の区別認識. 幼年教育研究年報, 26, pp.105-113.
- Winkley, L 1982 The implications of children's wishes : research note. *Journal of Child Psychology*, 23(4), pp.477-483.
- Witty, P. A. & Kopel, D. 1939 The dreams and wishes of elementary-school children. *Journal of Educational Psychology*, 30(3), pp.199-205.
- Zelig, R 1942 Children's wishes. *Journal of Applied Psychology*, 26, pp.231-240.

## What kind of wishes do preschool children have? Using the “three wishes” method

*FUJISAKI, Ayuko*

(Hyogo University of Teacher Education)

*ASAO, Takeshi*

(Nara Women's University)

This research uses the “three wishes” method to collect standard data on the wishes held by Japanese preschool children at the beginning of the 21st century and discusses those wishes’ characteristics on a developmental basis. The “three wishes” method poses the following question: what would you wish for if you could have three (and only three) wishes for anything granted? Interviews were conducted with a total of 864 preschool children (423 boys, 441 girls; ages 3, 4, and 5 years) over the course of six years (2002–2007). The results are given in the following four points: (1) and (2) are the characteristics of preschool children found as a result of this study, and (3) and (4) show that characteristics common among data on elementary school children and adolescents in Japan are already appearing in early childhood.

(1) Children were asked their three wishes, and 68.3% of 5-year-old children, 59.3% of 4-year-old children, and 51.5% of younger children (3 to 4 years) were able to give three answers. These results indicate that for preschool children, the act of having a “wish” itself is by no means a simple task. The number of children able to answer all three wishes increased with age. Also, girls gave a greater number of answers than boys. (2) In early childhood, there are many wishes related to the “here and now,” not abstract wishes for things such as “money” and “social justice.” However, as older children (5-year-olds) become more interested in their “future self” and “future career,” wishes for the future begin to appear. This tendency is especially strong for girls. (3) The characteristic that wishes related to “possessions” and “personal demands” are numerous is common among data from elementary school children and adolescents. However, specifically, preschool children often wished to possess familiar toys. (4) The percentage of boys wanting specific tangible “possessions,” especially toys, was higher than that of girls. In contrast, girls had many wishes regarding “changes in the self” and “interpersonal relationships.” Also, girls often wished to keep “animals.” This tendency is also common among the data for elementary school children and adolescents as a characteristic of contemporary Japan.

### 複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、(社)日本複写権センターと包括複写許諾契約を締結されている企業の従業員以外は、図書館も著作権者から複写権等の行使の委託を受けている次の団体から許諾を受けてください。著作物の転載・翻訳のような複写以外の許諾は、直接本会へご連絡ください。

権利委託先： 有限責任中間法人 学術著作権協会  
〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-41 乃木坂ビル3階  
TEL: 03-3475-5618 FAX: 03-3475-5619 E-Mail: info@jaacc.jp

アメリカ合衆国において本書を複写したい場合は、次の団体に連絡して下さい。  
Copyright Clearance Center, Inc.  
222 Rosewood Drive  
Danvers, MA 01923 USA  
Phone: 1-978-750-8400 Fax: 1-978-646-8600 E-mail: info@copyright.com

子ども社会研究 24号 The Journal of Child Study Vol.24 June 2018

© 2018年6月30日発行 定価(本体価格2000円+税)

編集：日本子ども社会学会 紀要編集委員会

EDITED by The Japan Society for Child Study

発行：日本子ども社会学会

〒152-0004 東京都目黒区鷹番3-6-1 内外出版株式会社

日本子ども社会学会事務局

FAX: 03-3712-3130 E-mail: jscs@naigai-group.co.jp

ご購入についてのお問い合わせ

内外出版株式会社

〒152-0004 東京都目黒区鷹番3-6-1

TEL: 03-3712-0141 FAX: 03-3712-3130

<http://www.naigai-group.co.jp/>